



春日部考古学事始

春日部市教育委員会 文化財保護課長
中野 達也

1. 市域で暮らした祖先たちの足跡

市域の歴史の扉は遙か三万年前まで遡ります。郷土資料館常設展示室に入りますと、食糧や生活資源を追い求め、最初に市域に足を踏み入れた“旧石器人”が残した多種多様の石器をみることができます。それ以降、茅葺の住居を作り、ムラを築き、共同で生活を営んだ縄文時代へと展示は続きます。こうした資料は現在、市域に残された103箇所を数える『遺跡』の一部の発掘調査から垣間見れた成果を下に解説しています。

それでは、市内での考古学研究と発掘調査はいつ頃から始まったのでしょうか。今月号では、その研究のはじまりについてお話ししましょう。

2. 幕末から明治・大正時代の文献資料の記載

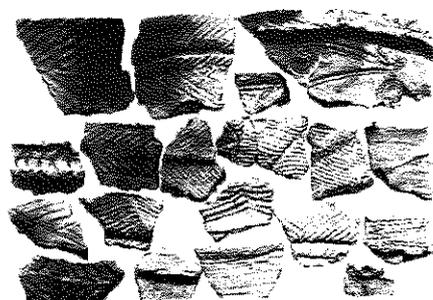
「高さ四、五尺庚塚と云、この外西北に登り五丈計り屈曲せる坂あり、そこより貝殻多くいづれば貝殻坂とよべるなり」と、幕末に編さんされた『新編武蔵風土記稿』の塚の項では、豊春地区の花積の切り通しに露出した貝塚の存在が読み取れます。さらに明治26年の「埼玉県下の遺跡」でも花積に貝塚が所在する記載があり、明治31年刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表第2版』では「南埼玉郡花積貝塚」と明記され、学会でもその名が広まったようです。これ以降、首都圏の大学による遠足会と称した発掘が各地で行われ、花積地内でも多くの研究者の来訪が明治時代末頃から始まり、「リックサククいっぱい土器を持ち帰った」といった伝承を今でも地内で聞くことができます。

一方、市域の縄文時代の貝塚遺跡29遺跡のうち、23遺跡が所在する庄和地域にあっては、大正時代末に記された『寶珠花之今昔』が唯一の文献です。冒頭には「大字西親野井に貝塚あり」、「住民は魚介を取り生活を助けしことは今尚本村大字西親野井に貝殻の堆積層をなしてあるをもって証する」と、現在も良好な保存状態にある「神明貝塚」を築いた縄文人の生業にまで言及され、発掘調査がなされていないと、この頃すでに「貝塚」に対する歴史観が執筆した郷土史家の中で認識されていたことがうかがわれる一文です。

3. 本格的な発掘調査による歴史の解明

埼玉県下で貝塚の解明が始まったのは昭和初期で、当初は人骨の発見と土器の新旧関係の解明が目的にあり、貝塚遺跡が専ら調査の対象となりました。春日部地域では明治時代から文献に記された『花積貝塚』で昭和3年に最初の発掘調査のメスが入りました。その結果、表土直下の

貝を含む層から厚手の土器が、その下の貝層からはもろく、当時、蓮田式と呼ばれていた土器が層を別にして発掘され、関東地方で初めて土器の年代差(新旧関係)を明らかにする成果を得ました。つまり、上の層の土器は下の層の土器よりも新しいといった、年代序列です。その際、下の貝塚から出土した土器が、それまで蓮田式と呼ばれた一群とは異なる特徴にあるため、発掘した遺跡の地名を付け、「花積下層式土器」と命名されました。



昭和3年に発掘された“花積下層式土器”

しかし、これら貴重な発掘資料は戦火で焼失してしまいましたが、土器の型式名は現在もなお、縄文時代前期初頭(今から6,000年前)の文化として名称は継承されています。

庄和地域では昭和36年の「神明貝塚」の調査を皮切りに、同年には宅地造成に先立つ米島地区の「米島貝塚」が、38年には土取り工事に際した東中野地区の「権現山遺跡」が、39年には個人住宅の建築に先立ち西宝珠花地区の「陣屋遺跡」と、相次いで緊急発掘調査が行われ、貝塚遺跡のみならず、古墳時代や奈良・平安時代の歴史のページが紐解かれました。

4. 発掘調査から得られた成果の公開

このように昭和初期から本格的に始まりました発掘調査の成果は、郷土資料館の常設展示での実物展示をはじめ、市史刊行物では時代や遺跡毎に詳細に紹介しております。また、この2月中旬には春日部地域と庄和地域の両地域を対象とした最初の刊行図書であり、図や写真を多用した『新編 図録 春日部の歴史』の販売を開始します。さらには執筆に携わった市史編集委員による歴史講演会を2月27、28日の両日に開催しますので、是非ご来場いただき、郷土春日部の歴史をこれまで以上に堪能ください。

中野 達也

春日部市教育委員会 文化財保護課長。平成5年入庁、以来、発掘調査と文化財の保護に携わる。平成24年4月より現職。